おそめ久松 新版歌祭文

作者 近松半二

座摩社の段

敬白難波の里の大社座摩明神の鳥居前張廻したる一構へゝ、手の筋失物走り人息もすたゝ北濱から、四季の草木の賣買ゝ、花の顔見せ冬籠り、新參古參大當り、ぢ馴染、ぢ贔負綱八を、今入かゝりお休みを、打たり舞たり、神樂所の鈴の音さへ賑ゝへり參詣群集山家屋の、佐四郎ゝお百度のさしの數さへ九つ時瓦屋橋に、子がいから年季重ねて久松が、屋敷廻りも勤から主の目鏡よ油屋の、下人小助と二人連、宮にゝお百度現の佐四郎、見るより小助が思案顔、立とまつてアイヤ〳〵土邊に尻餅作り病ひとゑらぬ久松、何とした小助殿、怪我ゝおいかと劬ゝれゞ、イヤ怪我ゝせぬが、夕部から冷腹で、アイヤ〳〵とりや是寒の中よ水汲だおどもり、久三の病ひで急

病じや奉公の身のつらさい大がいおとといい押して居れど、斯仙氣が差し込んでからい、寸白樣におとかゝらゐやおらぬこと、ひよんな事じやおふ、小倉の屋敷の商ひ銀一貫五百目、晝迄ゐ請取にこいとのは使、霜先の銀念の爲の二人連といふて遲おつたら親方の無調法にある事、いつそわし一人往てこふかい、そんおら太義おがらそふして下され、是でい中〳〵一足もいかれぬ、コレ氣を靜めて茶店でおと待て居やんせこと、丸子持て來たらよいに、戻りゐ返魂丹買て來て進ぜふぞやと、傍輩の氣をかね財布裏表おき小倉島屋敷をさして急ぎ行、跡に小助い山伏の、かとひの傍へ小聲ゐおり、法印殿〳〵、ヨ、油屋の小助か何ぞ用かこと、貴樣ゐ銀設けさす事が有、アレあの宮の內で百度參りして居る人い、山家屋の佐四郎といふ銀持、こちの娘のお染樣にきつい惚やう、それ故にあの願參り、爰らが貴樣の能代もの、おれが思ひ打て貴樣に新禱頼ます仕業、今あそこへ

往てあのわろに逢て咄す中、何も角も筋が知る、貴様そこから立聞して居て占ひの寄妙を見せると跡が金ぞや、あんべいよふかゝつたら二ツ山ぞや合點かゝそんならあのわろが彼大身体の山家屋ぞやの、うまい〳〵と法印よ、ぞめし合してよい時分に、小助がさし足さいぞらぬ、佐四郎いか百度を、廻り ぞまふて神樂所の前にひれ伏、拍手ちよん〳〵、おむ座摩大明神、油屋の娘お染をわたくしが女房に持まする樣に、どふぞあつちからほれまする樣に、おむ明神おむ稻荷おむ八幡、おむ大師遍照金剛おむ觀世音菩薩、ナ〳〵佐四郎樣ぞやでざりませぬか、ヤ油屋の小助か、わがみやいつの間に爰へお ぞやつた、イヤたつた今來て後からお前のぱやきを聞ました、聞たかエ、面目おい、山家屋の佐四郎共いわれる者が、懸あれべこそコレ此錢さしを見てたを、シタリ百度參りといきつい凝やう、イヤ凝た段でいおい、元油屋の家にい親共から、百貫目余の取かへ、それを急

ゑ催促せぬゝあの娘故、後家のお勝にとふから云込で結納迄入て有、それゑけふ頃日後家が云分にゝ、いかにも上ませうけれど、縁の事ゝ親の儘ゑ無理押にも成ませぬ、あれが心を聞てからの何のかのと埒が明ぬ、そこでわがみに槌打さふと思ふて時ゑの用無心、イヤ羽織の裏がほしいの、加賀の裸を買ゝの、鬢剃の色拂ひ迄呑込でやつた此山家屋、夫にアかつといふまい、働きがぬるいとおつゑやるのか、慮外あがらきつと働らいて居ますぞへ、夫れあらこそお前のお望み、十分の物丸歩ゝ埒が明て有、アそりや本かいやい、ほんか啞か此間の夕の返事、かゝいらしいお染が筆、爰ゑ持て居るけれど、そゑいふお前の請あれば、アお目にかけまいわい、アこりや劫強ずとちやつと見せてくれ、見せたら此働きゑろゝ、ふゝ此望みが叶ふたら、禮ゝきつと飯櫃形てするわい、アア其みを、イヤめつたに代物手放されぬ、當世かけ商ひゝ浮雲、アア跡での禮ゝ禮、先へちつと力付

ぬとせいがあい、斯せふ、此みわしが讀で聞かします程に、よい返事の文句あら冥加錢を上さんせ、そいか、さらば開帳致さふか、何ぞや、よふぞやにあ下され嬉しく拜し參らせい、ソレ嬉しいと云て有ぞへ、誠よ歎あらぬ我身に淺からぬ沒ぞんもじの程、身に餘り添ふ存じ居る、ソレそこで冥加錢心得嗜み銀入から、豆板一ツ、ヤア〳〵其跡ハ〳〵、身に余り添ふ存じ居る〳〵得共、母樣の有身よて任せぬ譯でざいへば、先々に斷ヤ上居る、ヒヤアこりやどふぞや、サ、、、愛が味ぞや、母親の赦しさへ出たら、わしハお前に添たいといふ事ぞやハいな、又々母樣に尋ねいへば、緣の事ハどふありとそあたの好た殿沒を持とにヤあされい故、それハ〳〵嬉しう存居る〳〵とけつかるハい、エ、添い冥加錢今度ハはづんで貳朱一ツ、チット去めたと又着服、そふして跡ハ〳〵、嬉ぞう存居る〳〵へ共何分私ハお前がいやにてでざいヲイヤいや〳〵せくまい〳〵、こりや是ちつとした讀やう ぞや、私し

を、お前がいやで有ふといふひぞりの文ぞや、其證據の跡よあなたにも私をばおぶりの事と推し參らせい、ソレ〳〵若又眞實よていいい誓文〳〵私が事ハソレ爰が肝心の情根ぞや、今度ハ其歌ぞや冥加錢〳〵、サアやるいいやい、サア氣がせく跡を早ふ聞せいやい誓文〳〵私が事ハふつつりと思ひ切下されい、何の因果よお前の樣な男にゃ何と其跡ハぞふじゃ〳〵、サア此跡ハイヤもふ聞おんすな跡ハほんやくたいぞや、壹歩一つ井戸へ落したと思いんせと、聞て佐四郎ハおろ〳〵顔、お性根取れた鼻紙袋、下地が拔たさし斗の百度參りも恨めしき、アそふ力落した物でもない、お前の戀の邪广といふハ久松といふ丁稚め、何でもこいつに腐り付ておると見へます、尤男ハあいつよりちつとお前がつぎあれど肝心の所で喰付したら、乘かへるハ知て有、サイヤイ おれが胥中の骶のずんに是ほどお疣が有こいつが前後ろに振かハつて有くらいおら、恐らく前髪めよハ仕

負ぬ物を殘念やと尻を抓つて無念がる、イヤ物には祈禱といふ事がでざります、幸あそこゝ山伏が有、久枩とお娘と縁切をお願あされぬか、ホンニ是ゝ氣が付あんた、第一おれが戀があるかあらぬを見て貰ゝにやあらぬ、若しひよつとあらぬといふたら、又十二文損をするの云やと、根が云ゝんぼの安物から、網よかゝつた鳥居の前、うらあひは判墨色相性の考へ見て上ませふお這入と、呼込れるを云はゝ云て、はいる佐四郎さし込だ小助が相槌、あたの年とゝ三十一でございますあゝ、三十一、當年三十一歳の男お生れ年が寶永六年巳丑、は一代の守本尊ゝ月の廿八日不動明王性分ゝ火にして、則住所より南少し東に當り水邊ゝ待人有、女と見へます、こりや色事でござるあ、旦那何ときついか〳〵、成程此旦那大色事仕でございます八卦の面にそふ見へる、トキニ其元樣ゝ丑の年で牛の寢た程金銀を持てござる、此度東ゝ當つて金銀の星が顯ゝれまする是が

其元様の年頭ゑ當る、則彼金銀の勢ひで此女ゝお手に入筈じやが、爰に一ッ障りが有、其元様ゑゝ脊中の氏に疣が一ッ有ふがの、イヤアサア〳〵見通しじや〳〵、サア〳〵おけりやあらぬ理じや此疣の有所が悪い、惣体脊中に有疣ゝ背疣といふて只今師走にゝ或ゝ牛房鰊鯖何あれ角あれ人ゑ物をやるぺつかり、錢銀を取れる斗で是迄頼んだ事が一ッも埒が明ぬと見へます、どんと其通り、そふ有ふ、時に又一ッ大きあ邪摩が有、かゝつた物四角あ物じやが、坎艮震巽りかんがすかん、兌中斷とゝつてたゝばたの兌の卦に當る、人相に取てゝとゝや前髪と見へます、彼金星銀星が寄合ふとする中へ此髪前の眞鍮星か毎晩夜ぺひ星に成て邪魔するといふ卦躰夫がけたいで成ませぬ、どふぞ其前髪を、此法印か行力で祈り殺して進せませふ、先縁結びの星祭りとりや其元様のお家へ參つて致さゑやあらぬ、サアそれが第一お頼みヤたい、ヤさぬ事ゝ聞へぬが金銀の

星を祭るゝ同氣相求めるの道理で、金銀の元入が餘程入ます、マア何はどでも大事おい、備へ物ゝ隨分大きお鏡餅十二重跡ゝ法印が受納致す、扨祈禱の間酒肴で我等を馳走おされるが能、斯ヤせば迎手前が喰たい呑たいでゝござらぬ則夫が星樣への馳走、物をほしがるによつて是星ゝ、祈禱始めに宮の内の福屋でマアちよつとは神酒上よかい、旦那こりやよでざりまえよと、かだてる太皷神樂所の、皷片手に糟禰宜が、山家屋佐四郎樣、は献上の神樂が只今上りまずマアお出おされませ、是ゝいかお糅交てどんちやんと、是もやつぱり今の願、神樣を頼むに及ぬ、コレ神樂の酒手ゑや貴樣も馳神酒の相伴さずゑ、イヤ有難いゝさらゝ福屋で腹存分禰宜山伏の位爭ひ、願主樣先お入と皷方先舌つゞみ打連茶屋へ勇ひ行、小助ゝそろ〳〵小戻りし、手招きずれば最前より待居山仕の浪人者鳥居の影より又一人、是も手合と顔見合せ三人いつしよに寄こゞる、中

よも勘六氣をせいて、シテくだんの物い、コリヤ聲が高い、あの井の内よ仕かけて置た、此鈴木彌忠太久松めとい子細有て意趣の有中、きやつめを仕くじらす工面い小助斯、々合點か、よし〳〵、彌忠太樣い勘六と、福屋で呑でござりませ、前髪めが戻るを待て、手工合首尾よふ〳〵と、耳から耳へ相談さらり、去めて三人別れ行、人一盛り、夢の世や、浮名の端の種油獨り娘と寵愛の、お染が思ひ日に千度行つ戻りつ蝶ふの羅の撰樣を振袖よ包むとすれど娘氣の、逆ふ心を一筋よ、座摩の宮居に歩み來る、女のお傳がヤお染ゐ、宮の内の茶店でちとお休みあされませ、私い爰よ張番して彼人が今でも見へたらコレ斯と、ひへゞお染いはゝ笑あがら、神のお庭で勿躰あひ差合のあい時に、顔を見るのが樂しみと、待人よりも待るゝ身、久松いいきせきと屋敷の用事そこ〳〵に、足元かろく立歸る、お染い見るより、コレ久松樣と、云れもせず爰に〳〵と寄添ゞ、久松も途中の人目、コレお

傳殿小助殿ハ見へあんだかと、云つゝ傍りに氣を付れば、呑込お傳が、ヤ
ア寮人樣、わたゑやあの綱八の芝居が一切見て參じたい、ホンまそおたハ芝
居好、戯入でおけりや行れぬに、けふハ幸ひ勝手に往てお呉や、隨分綏り
とだんあいぞや、ハイ〳〵、そんあら往て參ゑよ、久松殿もお染ゐと、どこぞそ
こらへ戯入さんせと、はづすハ猫に鰹木の、氣を通り札鼠木戸、是も忠義
と行跡よ、契りし中ハ詞數、云ず取手を振放し、ヤ此寮人ゐ、お前ゐハ退付
ゑい男お持あさるぜあ私ハ下人の事、何とせふゑよ事がおいといて侫
強ハやつぱり愚痴、勿躰おいお主樣が、是迄のお志眞實冥加あふ存じま
すと、押下れば摺寄て、コレ夫ハアア何の事、内でハ人目が有よつて、久松〳〵
と家來あしらひ、樣といふ字ハ、口の中で、常住消て居るハひの、せめてこ
んあ所でありと、女房かお染かと、いふて湛納さしもせず、お前樣の寮
人のと、献上向お挨拶ハまだわしが氣を疑ふてか、そもや、見初し其日か

ら、エ、こんな事何やかや云たいけれど、人が見るので何よも言れぬ、どこぞ人の聞ぬ所で、しつぽりと咄したい、こつちへおじやと手を取ば、そふじやて、茶屋の内もやつぱり人目、どこぞ暫しの隱れ家と、覗く八卦のかこひの内、ヤア誰もあいないの、外から襖ん戀の堺、サア此間にちやつといのと手を引主從三世相、二世を兼たる妹脊鳥忍び入こそわりあけれ、神樂の鈴も時移る、ほろ醉機嫌よ法印ん、そろ〳〵目して鳥居前、エ、さやつも客ひやつじや、喰れもせぬ吸物にたつた酒三銚子、ホンニ端た酒呑ふ迚店を明たん不用心、山伏が物盜れてん見て貰ふ所がおい、ヤヤ何やらぶつ〳〵呟くやうな此内に人の聲有ん、ハテ怪しやと暖簾の内、差覗いて惚り仰天、這入れもせず氣ん上づり、繪馬に上つた一來法師、立ずくみに成て居る所へいきせき走つて下男、コレ〳〵法印樣一ッ見て貰ひたいと、入んとすれば、デ、コレ今内へ這入と水火木金乱驟ぎ、水火土金粹を聞せいやい、八卦から

爰でもつ向見てやる、失物か走りか心中がいつた者あら奇妙ゑ所を見て見せるぞ、イヤそんあ物ゑやあいこちの旦那山家屋の佐四郎様が、げさから今ゑお歸りあされぬ、ゑ、それかよいい、此山伏が行力を以て今爰へ天くだらして進せる、佐四郎様〳〵、ゑ、法印坊そこにかと、出てくる佐四郎ゑすれ違ひ、そつと後ろの襖から鳥居の中へ行二人、戀しいお染と夢にも云らず、サア〳〵一時も早ふ星祭り、是から直ゑ手前が宅へ、そんあら參ろか、イヤ待たり肝心の商賣道具持、參致そと圍ひの内、素早いやつもふ逃おつた、扨い今のが彼前髪めで有たあ、よふぼん代を喰逃に仕おつたあ、よい〳〵此意趣返しいたつた今お染がお前ゑ靡く様ゑ祈伏るは我珠數先、さんげ〳〵六根だいせふ南無不動明王〳〵、何ぼふに見とむあふても、男いれと持喰ねば立ぬ、身躰よしの山家屋で、腥料理喰次第、蒸菓子羊羮責かけ〳〵榮耀の有たけ思いさらさ〳〵、さしものお娘も

喰につき、魂の返るゝ今の中といさんで打連歸りける、南の辻より人立し喧嘩〳〵と騒ぐ聲、驚き出る久松お染、下女もとつかゝ久三の小助、一所より落合ふ床几の上、喧嘩ゝ振物國侍、相人ゝ町人腕くら取れ、引立られても凄まぬ男、こりや何とさつしやります、何とゝゝ素町人め、武士の足を泥脚で踏あがらぬ兎共ぬかさぬ慮外者め、サアえいわいお、慮外あら誤るぶん、ヂア爰を放さんせ、踏たゝおれが脚踏れたゝこあたの脚、武士じや町人じやてゝ脚より違ひゝ有まい、そんあこつき喰男しやおい、聞ぬといふてとふさある、お太刀ひねくつた迚めつたより切れる物しやおい、人伝せずとお侍どふあと召れとすり寄骸、擠しきぶち放すも刀の穢れ、どふしてくれふと傍邊り、有合財布眉間へぱつ云り、ハッと驚く久松を、お染が抱しめ押ゆる袖、氣を紅裏の裏へ行小助がきつとコレヤ、あの包ゝ手前の銀財布鬮もおつ云やらずお侍より似合ぬ仕かた、誠に是ゝ心せく儘手

前の鹿相、眞平〳〵、あむ三寶、少々血が付ヤた、幸の井の元を濟むる穢れん薄けれど包みし惡事摺かへる、手際を見せじと小助が氣配り覆に成て立島の、財布手早く、久松此娘ん懷へ、お染ゐ掛り合にありや惡い、私もお供サア〳〵早ふとせり立る工みの底ん白齒のお染、久松早ふと手を取てせんしい所が結ふの神、足を早めて立歸る、跡ん人たへ宮芝居の、切のめりやすしめやかに、咀く二人か仕濟し顏、彌忠太樣首尾ん、ヲ、件の物ん手洗鉢の下に有、うまい〳〵と立寄て財布取上、彌忠太樣、けふの働き代ん ゑ、メレ金二兩、ヱイ眉間ゑ疵迄付られて、たつた是かいな、サアよいん、其一貫五百目ぞふで小助にも、口錢やらにや聞おるまい、そんならふてうんとやでせふ、ぐれのこぬ内サアでんせと、銀懷へ取納め連でゐい顏跡先に、のし〳〵歩す鳥居の影、盜賊待と聲かくる、惚り云ながら騷がぬ顏、盜賊とん誰が事、齊等が事さ、ヱ、何を證據に盜賊とん、サアぬかすまい、今日此方の

屋敷よて油屋の下人久松よ渡せし銀子、子供上りの若いやつ何共心元なく、跡よ參り窺ひ見るに儕等が衒事、かやうの吟味仕れとお金役よ付置れた、岡村金右衞門といふ者だいい、サア儕等引くゝつて屋敷へ連行、腕を廻せと詰かけられ、そふ見られたら是非がおい、成程其銀い騙りましたが、此お侍い通り合して連に成たべつかり何よもに存じおいお方、私一人縄かけてサアお引あされませ、サアー〜と汕斷を見すまし彌忠太が、差たる刀拔打に肩先すつぱと金右衞門、同じく拔て切結ぶ兩方劣らぬ牛角の早業、彌忠太い八方に眼を配つてソレー〜そこをと、聲の助太刀ちからよて、强氣の勘六まくり切、おぐる刀を請損じ牢籠所を付入て兩脚おかれよろ〜〜うんとのつけに倒れ伏、勘六い一息はつと、人や見ぬかと見廻す彌忠太、勘六ぞふした、氣遣ひさんすおもふとまつた、ホイシテ此捌きいどふせふ、ハテどふといふて高ぶけりまゝ、身共迚も爰にい居られぬ、ドシ

其銀を此方へ彌忠太樣、お前此銀取と笠の臺が飛ぞへ、藏屋敷の侍をば
らしたからい、どふでおりや遁れぬ命、迚も助からぬからい、何も角も勘
六が引受てとな樣の名い出さぬ、づきの廻らぬ内早往かんせ〳〵、尤モ、
適男じや緣有ば重て、細言いいずと早ふ〳〵、テ、さらい〳〵と別るゝ跡
納めた勘六そろ〳〵と、死骸の傍へ立寄て、首尾能行たぞ、テ、もふよでん
すかとむつくと起る體い血まぶれ、勘六殿今のでよかつたか、能共〳〵、
物ゑた物を又こつちへ、是も貴樣の切れ樣が上手だから、何ぼ切ても疵
痛せぬ、紀州の源藏太義でごんした、テ、サ、そこらをさす物かいやい、シタガ余り
拍子にかゝつて、よつ程の疵いたみやせぬか、何のいやい、もふ最前吉野
丸付て置た、夫を知ずよ今の侍めが、迯て、逝おつたぞよ、コリヤ此位の疵いた
つた一付で直るいやい、欺れめが、ソレ酒代の一兩、忝い、サア〳〵是からとち
の商賣、紀州源藏樣お歸り ゑや、ア、コリア立前所ゑやあい、アレ もふ芝居が果る

人の見ぬ間に早ふ行〳〵幕際網八の切狂言の果太皷音に紛れて

野崎村の段

年の内よ春を向へて初梅の花も時をる野崎村、久作といふ百性せいしき中に女房い、万事限りの腸病ひ、娘おみつが介抱も心一ぱい二親に、孝行臼の石よりも堅い行義の爪はづれ、在所よ惜き育かや、冬編笠も辮り三味線つぼもすまたの弾語り、ぼ評判の繁太夫、ぶし本い上下ぞち本て六文、お夏清十郎の道行〳〵、あづまからげのかいをよおきこんお形でも五里十里、通らをやれ、嗅様の煩ひで三味線も耳へい入ぬ、手の隙がおい通つて下され、清十郎涙くみお夏が手を取顔打おがめ、同し戀をい云おがら、お主の娘を連れて退ん上の罪もおし、聞とむおい、通りや〳〵といふ聲よ、久作い納戸を出、大坂ではやる繁太夫ぶしそおたにも聞したけれど、病人の氣よ搆いふ本おと讀で氣晴し仕やと、義理有中も子を

思ふ悪みゝ厚き古合羽の、たゞと入からこつて〳〵錢取出して、一冊買ませふ、お夏清十郎、道行戀の濡草鞋、コレ見や、此お夏ゝ手代と念頃して姫路を欠落する道行、同し娘でも世ゝさま〳〵、繩三里の大坂へ芝居一ッ見よも行ず、今度の大病から日の見へぬバゞの介抱達者あおれが喰物迄其樣に氣を付てたもる孝行娘、若勞れでも出よふかと、おりや夫を案じるゝいのふ、ヲ勿躰ない事言しやんす、煩ふて居さんす嗅ぎより健あお前のお心苦勞せめてもの手助けと思ふた斗、其樣な事苦にやんで煩ひでも出よふかと、わたしや夫が悲しうござんす、わつけもない、したが百日と限りの有ばゞが大病、案じるを無理でゝないが玄庵殿の加減の藥で、今朝から末のかさよおも湯が二はい通つた、見かけよ寄ぬ功者な醫者殿、幸けふゝ日和もよし、久松が親方殿へ歳暮の禮に往て來る程に、隨分〳〵に氣を、付きやといゝつゝ、脚絆草鞋がけ、紐引ゑむれ

ぺ、と丶樣とした事が、此短い日に畫過、明日の事におさんせいで、何のいやい、年とそ寄たれ此足に覺へが有、一時三里犬走り日暮迄にハ戻つてくる歳暮の祝義ハ〳〵此藪苞山の芋ハ鰻よ成、久松が年が明たらぺ、われハ又お内儀に成、夫樂しみよよふ留守せい、往て來ふと身拵へ、藪苞肩よゃゑいとこお、表へ出しが立とまり、取譯今年ハ早ふ咲た此梅、何より角より能土産と、春待顔に咲花を手折て苞に一枝を、添てひよか〳〵野崎村、跡に見おして、出て行、影見送りて久松が事のみ思ひ兎や角と、胸に一ぱい半分の水はかり込藥鍋、一へぎ入る生姜より、辛い頬つき久三の小助久松引連入口から、久作内に居やるかと、つと這入ぺおみつハ嬉しく、久松樣よふゞ戻つて下さんした、定めてあたハ送りのお方、お茶よたぺこと嬉しさに、立たり居たり氣もそゞろ、やかましいわい、うそ穢い在所の茶飲にハこぬ、ゴリヤ追從せずと聞て置よ、此久松めが親

方の銀一貫五百目お山狂ひにちよろまかしたによつて、けふ連て來たんな、久作と三ッがあんで詮義するのじや、親父を出せ出せ〳〵と辰巳上り身の誤りよ久松が差俯ひて詞さへ、あいよん若やと思ひながら、腹立んお道理ながら、何のマア久松樣に限つてよもやそふした事ん有まい、定めて是ん何ぞの間違ひ、魔がなくばあいといふッイ云わけをして下さんせいな、べるん喋るん、コリヤヤイ天窓こそ前髪あれ其素早さ、傍輩にん辭宜をあしに、取て置のお娘迄、此跡ん云ずにこます、裾貧乏のはつた行過丁稚め、首綱のかゝる事言譯に如在が有かい、小倉の屋敷へ請取よ往た爲替の銀、に役人から改めて渡つたん眞實、内へ戻つて明た所ろがわやひんのどふみやく、道の間ですりかへた品臣の太夫、早咲久松でございます、ハリトウ〳〵、白眼剝ん無念あか、無念あら銀立るか、有まいがな、マア久作ん何所よ居る、出さらずば引出さふと、欠入袂を久松引とめ、成程銀

を摺かへられたい皆私が無調法、身の明りの立迄い在所へ行と、後室ゐの結構あに了簡それをそあたが、ヤイ〳〵何ぬかすぞい、そりやわれが勝手了簡の聞損ひおれよい此詮義仕ぬいてこいと、内證で後家様の云付、ゑやよよつてめつきゑやつきするか何ゑや、ひんこめ出されと大聲を、おみつが押へて、コレ〳〵に尤でござんすけれど、奥の病人に能事がましふ聞しましてい病氣の障り最そつと靜よ、イヤ高ふいふの ゑや、〳〵、是程わめくに聞耳潰すい親仁もぐるの仕事ゑやあ、イエと丶樣いああたの方へ歳暮の禮に往かれましたゞふして道が違ふた事、若持病やあゞ發りいせぬかと、外も氣が丶り病架への聞へも氣づかへ久松か、身の言譯に差込だ、積を覺へる計ゑ、弱みへ付込惡者根性大坂へ往たが定あら否あがら道で逢筈、そんあてれんぬかすあやい、ドレ最家搜しと出かけざ成まい、邪魔ひろぐあとおみつを引退取付久松面倒あと、踏やら蹴やら無法の

打擲、詮方もあき扼からに、道引返しいつさせき戻る久作かけ入て、小助を引退突飛し、留主の間へ來てわつぱさつぱ樣子に寄て了簡せぬぞ、ヲよふ戻つて下さんした、最前から久松樣をあ、く、よいてや久作が戻るからい娘もじつと落付と、納める程猶ごふ腹よやし、大まいの銀引負した其ぺりめ詮義よ來た小助い親方の代、夫を又わりや何て投たのじや、是い迷惑あ、ひぺり骨見る樣あ手で、血氣あこあた投たのでいあい怪我のはづみ、出端れの曲り途で道が違ふて、留主の間へ大坂から息子が來たぞやと、若い者共がゑらしてくれたで、行戻り五六里を助つた往安堤引返して戻つたが、そんあら何か其引負で久松い戻つたのかつて、夫聞てつて落付たつて、何角い指置て傍輩衆のお世話で有ふと、影あがら云てぺつかり居ますいいの塞い時分によふ連立て來て下さつたあふ、ソレおみつよ茶あと汲んかいやい、コリヤ納めあ〳〵、わりや夢に見た事も有まいが、一

貫五百目といふ銀高子の科ハ親にかゝる、銀立るか、但ハ又願ハふか、二ツ一ッの返答聞ハい、よいわいの、其樣よ息せいはるハ大きな毒、兎角人間ハ心長ふ持のが藥じや、其藥で思ひ出した、土產にせふと思ふた此山の芋をとろゝにして、出來合の麥飯を進せふかい、置やい、見せかけ計の正直倒し麥飯のとろゝのと、ぬらくらとハ拔させぬ、あんだらくさいと蹴ちらす藁苞、破れてぐハらりと出る丁銀、久松が引負の銀、渡したからハ云分有るまい、とつとく持ていなゝやれと、聞ておみつも久松を思ひがけなき驚きに、小助もぞよつと仕ながらも包改め、こりや正眞ゝや、出にくい所からよふ出たな、吹きや飛樣な內のさまで、泥龜三つで壹貫五百目請取からハ云分ないわい、そつちに云分がないとも、こつちよぐつと云分が有、といふも古い物ゝや是迄お世話に成た親方樣、ハ恩こそ有、恨みハなけれど、人に欺され取れた銀引負の惡遣ひのと、な

い名を付て貰ふてゝ世間が濟ぬといふて無理隙取でゝおい親が暫く預つて置程よ此通りいふたがよい、サウ廿年おれが若いと、われにぐつと馳走も有ど入さる殺生サアく早ふ逝だかよかろと云れてどふやら底氣味悪く、銀の出入さへ濟で仕舞や外の事ゝお攝ひおい、さらばお暇ヤさふと、打違取出し捻込押込ハヽア命冥加あ壹貫五百目、内へ逝で出した所か墓にあつて居やせまいか、ハテ仇口を聞ず共足元の明い中、ヲ逝い玄や、銀とそゝ主の物、何の其おれがでよ、おれが旁げて、おれが足で、おれが歩行ておれが體が逝るよ、ぐつ共云分おい筈と、へらず口して、とコバ門口拄で天窓、ァいたし小助ゝ足早に、大坂の方へ立歸る、おみつゝ親の氣を兼て、諸へあげれば久松すり寄、此身の手詰ゝ通れても此お暮しで余程の銀、跡でお前の迫難義にゝ、ハテおれじや迚相應のかくまひゝせまい物か、始末してためたあの銀ゝ黒谷の方丈へ上る冥加銀、氣づかひ仕やんあ

まんざらあれ斗でもないわいの、改めていふでいなけれど、末いわがみとひとつにする約束で此おみついべゝが連れ子、あれを否でもないそふあり、折を有べ親方殿へ隙の事を願いふと思ふて居たが、是がほんのもつけ重寶、最大坂へ逝しいせぬ、早却あれど日からもよしけふ祝言の盃さすぞ、何とおみつよ嬉しいか〳〵、我等い又天窓を丸め參り下向に打かゝらふと、頼み寺へ願ふて袈裟も衣もちやんと請て置たてや、宰餅い搗て有、酒も組重も正月前で用意いして有、サア〳〵早ふ拵やと、藪から棒をつゝかけた、親の詞よ吐胸の久松、しらぬ娘い嬉しいやら又恥かしき殿もふけ、顔い上氣の茜裏袂くはへるおぼこさを、見るよ付ても今更に、否應あらぬ親の前急に思案も出の口の、壁よいの字を垣一重、裏の病架よ嬶嗽聲、ホンコ　こちらの事よ取込で定めてばゝが淋しからふ、久しぶりで久松よも逢して、此事を聞たら藥より利目がよい、ハテ俯いて斗り居

ずとかみつ鱠も刻んておけ、久松お云やと、先に立悅ひいさむ親の氣を、云つて破らぬ間似合紙襖引立入にけり、跡に娘い氣もいそ〳〵日頃の願ひが叶ふたも、天神樣や觀音樣、第一い親のおかけ、こんあことあら今朝あたり髪を結て置ふ物、鉄漿の付樣、挨拶もとふ云て能かろやら覺束鱠拵へも、祝ふ大根の友白髪末栄刀と氣もいさみ手元も輕ふちよき〳〵、切ても切ぬ戀衣や、本の白地をあま中よ、お染い思ひ久松が、當をえたふて野崎村堤傳ひに漸と、梅を目當よ、軒のつま、供のおよしが聲高に、ヤは寮人泡、かの人よ逢ふ計、寒い時分の野崎參り、今船の上り場で、教へて貰ふた目えるしの此梅、大かた爰でござりませふぞへ、もそつと靜にいやいのふ、久松よ逢たさよ、來事い來ても在所の事、目立てい氣の毒そあたい船へ、早ふ〳〵と追やり〳〵、立寄あがら越かぬる戀の峠の敷居高く、物ヤお頼みヤませふと、いふもこい〳〵暖簾でし、百姓の内

へ改つた、用が有あら這入ませやんせ、〳〵卒爾あがら久作樣ゝ內方でざんすかへ左樣あら大坂から久松といふ人が、げふ戻つて見へた筈、ちよつと逢して下さんせと、いふ詞つき形かたち、常ゝ聞た油屋の扨ゝ、お染と悋氣の初物胸ゝもや〳〵かき交繪まあ板、押やり、戸口に立寄見れば見る程、美しい、あた可愛らしい其顏で、久松樣に逢してくれ、そんあお方ゝこちやゑちぬ、餘所を尋ねて見やゑやんせ、あほうらしいと腹立聲、心付ねば、ほんにまあ何ぞ土產と思ふても急あ事、これ〳〵女子衆、さもしけれ共是成と、夢にも夫と白玉か露を帛綿に包の儘差出せば、こりや何ゑやへ大所のお寮人樣〳〵と云れても、心が至らぬ置ゑやんせ在所の女と侮つてか、ほしくばお前にやるゝいあと、やら腹立に門口へほればほどけてばら〳〵と、草ゑ露銀けし人形、微塵に香箱割出して中へつか〳〵親子連、出てくる久作、とふゑや繪ゝ出來たで有ふ、扨祝言の事婆

が聞てきつい慨こび、ゑやか年ハ寄ない物、さつきのやつさもつさで、取上せたか頭痛もする、いかふ肩がつかへて來た、ア、橙の數ハ爭われぬ物ゑやハいの、左樣あらそろ〳〵私がもんで上ませふか、ソリヤ久松忍い、老てハ子に隨へゑや、孝行にかたみ恨のあい樣に、おみつよ、三りをすへてくれ、アイ〳〵そんあら風の來ぬ樣にと何があ表へ當り眼、門の戸ぴつゑやりさしもぐさ、燃る思ひハ娘氣の、細き繕香に立煙、サア〳〵親子じや迚遠慮ハあい、艾も痎癖も大摑みにやつてくれ、アイ〳〵きつうつかへてでざりますぞへ、そうで有ふ〳〵、次手に七九をやつてたも、チツトこたへるぞ〳〵、サア居ますぞへ、ア、〳〵ゑらいぞ〳〵、あすが日死ふと火葬ハ止にして貰ひませふ、丈夫よ見へてももふ古家、やねもねだもとりや一時に割普請ゑや、アツ、ア、爺樣の仰山あ皮切ハ仕廻でござんす、ホンニ風が當ると思や、誰ゑや表を明たそふあ、ゑめて參ゑよと立を引とめ、よいわいの畫中に鬱とし、

久松〳〵〳〵久松餘所見計仕て居すと云かくともまぬかいの、餘所見ゝせぬけれど、ヱヽ、覗くが悪い、折が悪い悪い、〳〵〳〵と目顔の仕かた、悪いの覗くのと、足に灸こそ据てゐれ、何所もおみつゝ覗きゝせぬ、アノ悪いと云ましたゝ、慥今日ゝ瘟癪日、夫に灸ゝ悪い〳〵〳〵といふたのでござります、ヱヽ、愚痴な事を、此樣に達者なゝ、ちよこ〳〵灸すへ、作りをするそこで久作、アッヽヽヱヽ、何云やゝい、わがみ達を、達者な樣よ灸でもすへるのがおいらへの孝行云やぞや、ヲそふでござんす共、久松樣よゝ振袖の美しい持病が有て、招いたり呼出したり、にくてらしい、ヲン病ひづらが這入ぬ樣に、敷居の上大きふ云てすへて置たい、コレおみつ殿、振袖の持病のと、いろ〳〵の耳こすり、ゝしたない事聞てゝ居ぬぞや、ヽヽかゝつた事がお氣に際つた、ヲヽ、際らい云や、こりやおかしい、其譯聞ぞへ言ふぞやと、我を忘ていさかいを、外に聞身の氣の毒さ、振の肌着に玉の汗、久作も持

あつかい、アヽ、コリヤ肩も足もひり〳〵するがあ〳〵、まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかいの取越かい、炙業のかゝり、喧嘩の行司さすのかいやい、二人あがら嗜め〳〵、イエ〳〵摂ふて下さんすあ、今の様ああいそづかしも病ひづらめがいゝしくださる何をいふやら〳〵、両方共、おれが貰ひ玄や、ヨヨ、中直しが直に取結びの盃、髪も結たり鉄漿も付たり、湯もつかふて花嫁形を、コリヤ作つておけと打笑ひ無理に納戸へ連て行、其間遅しとかけ入お染逢たかつたと久松に縋り付ば、アヽ、コレ聲か高ふでざりまず、思ひがけあい爰へゝどふして、譯を聞して〳〵と、問れて漸顔を上、譯いそつちに覺へが有ふ、私が事ゝ思ひ切、山家屋へ嫁入せよと、殘しておきやつたコレ此みそあたゝ思ひ切氣でも、わしや何ぼでも得切ぬ、余り逢たさあつかしさ、勿躰あい事あがら観音様をかこ付て、逢よ北やら南やら、玄らぬ在所も厭ひゝせぬ、二人一玄よよ添ふあら飯も焚ふし織つむぎ、どんあ貧し

い暮しでもわしや、嬉しいと思ふ物、女の道を背けとい、聞へぬわいの胴欲と、恨のたけをゆふせんの、振の袂に北時雨晴間い、更にあかりけり、曇がちなる久松も、脊撫さすり聲嚬め、其お恨みい聞へて有ど、十のとしからけふの日迄、船車にも積れぬ恩仇で返す身の徒冥加の程も恐ろしけれど、委細いみに殘した通り、山家屋へでざるのが母様へ孝行家の爲よふ得心をあされやと、いへど諾へも涙聲、いや嵜や〳〵わえやいや嵜や、今とあつてそふいやるい、是迄わしに隱えやつた云号の娘浄と女夫に成たい心えやの、是非山家屋へ行あらば覺悟いとふから究めて居ると、用意の剃刀取直せば、夫い短氣と久松が、留てもとまらず、イヤ〳〵そあたに別れ片時も、何樂しみに生て居よふ留ずと殺して〳〵と思ひ詰たる其風情、そんあら是程ヤても、お聞わけいでざりませぬか、添れぬ時い死るといふ、誓紙に腔がつかれふかいのふ、ヤ達てヤせば主殺し、命にかへ

てそれ程迄よ、思ふが無理か女房じや物、叶ハぬ時ハ私もいつしよよ、お染様、久松と互に手に手取かハす悪縁、深き契りかや、始終後ろに立聞親、其思案悪からふと、いハれてはつと久松お染さハぐを押へてア、大事ないく、アヽ下よ居や、因縁とハ云おから、和泉の國石津の御家中、相良丈太夫様といふれとさの息子殿、聊の事で家が潰れてから、吾儕の乳母ハおれが妹、其縁で十の年迄育て上た此久作ハ後の親、草深い在所よ置より、知恵付の爲油屋へ丁稚奉公、夫程迄に成人して商ひの道讀書迄、人並に成たハゴリヤ親方の大恩其恩も義理も辨へぬハ、是見や、先よ買たお夏清十郎の道行本嫁入の極つて有、主の娘をそゝあかすとハ、道しらずめ、人でなしめ、ヤとりや清十郎が咄しじやわいの、とふから異見も仕たかつたけれど、てうど今の様な事が有ふか、と夫が悲しさ一日延、二日延しする間ふつてわいた銀のもめ事、是云立に隙を貰ひ、分て置のが上分別と

思ふから、引負の銀の工面、どの樣よ氣ぺつても高のしれた水呑百姓、繼の田地着類着そけ、おみつめが櫛笄迄賣代おし、漸拵へたさつきの銀、おさぬ中でも親子といふ名が有からは、肉心分た子も同然、可愛ふおふて何とせふ、コレ　お染樣でハおい、此本のお夏とやら、清十郎を可愛がつて下さるハ、嬉しい樣で恨めしいわいの、聞ての通りおみつめと女夫よするを樂しみに、病苦をこたへて居るアノ婆樣に、今の樣な事聞したら、何と命がでざりませふぞいの、若い水の出端にハ、そこらの義理もへちまのかハと、投やつてこな樣といつ迄も、添遂られるにしてからが戸ハ立られぬ世上の口ざやわい、コレ、久松めハ辛抱ざた女房嫌ふて、身上の能い油屋の聟に成たハ、コレ榮耀がざたさざや皆欲ざや、人の皮着た畜生めと、在所ハ勿論大坂中に指さゝれ、人交ハりが成ませふかいの、コレ〳〵愛の道理を聞譯て、思ひ切て下され、ヤ　コレ拜ますわいの〳〵、是程いふても聞入ず、親

に達が滿足に產付て置ゑやつた其骸を、切さいて淺ましふ死るのが女の道か心中か、ゃ久松も其通り、不義密夫の惡名請、實親の名を汚す斗か、世間の義理も主の恩も、むちやくちやにして仕廻ふのが、侍の子か人間か、返事次第で思案が有と、眞實眞身の剛異見骨身にこたへて久松お染、何と返事もおいゑやくり、是程いふても返答のおいゝ二人あがら不得心ゑやの、ア、勿躰おい、實の親よも勝つた恩、送らぬのみか苦をかけるも、私が不所存から、イヤ〳〵そおたの科でゝおい、皆此身の徒から、親にも身にもかへまいと、思ひ詰ても世の中の、義理にいどふもかへられぬ、成程思ひ切ませふ、ヨふ侍合點おされました、わしもふつつり思ひ切、おみつと祝言致しまする、そんならそおたも、お前もと互に目と目よゑらせ合心の覺悟い白髮の親仁、ナノさつぱりと思ひ切て祝言をゑてたをるか、何の嘘をゞませふ、娘にも今の詞に、微塵も違ひいでざりませぬか、久

松の事ゝ是限り、わゑや嫁入をするわいのヨ、出來た〳〵、むゝつけお親仁めと腹も立ず、よふ聞入て下さりました、晩の間のゑれぬ婆が命、息の有中祝言が濟だと聞して下さるが、大きお善根、善ゝ急げゑや、今爰で盃さそ、おみつ〳〵と呼立る聲聞へてや、病架より母ゝ漸探り出、親仁殿、久松もそとよか、待に待た娘の祝言嬉しうて〳〵、此間にない氣色のよさ、大煩ひの上目迄潰れた因果人佛樣のお迎ひを待兼たに、難面命が有たりやとそ、悦ぶ聲を聞といふも、孝行お久松がお蔭、不束かお在所生れ心にゝ入まいけれど、末の面倒見てくだされ、頼まするといふ中も、痰火ゝ胸にせき上せゞ、此寒いのよ寐所にやつぱり居たがよござりまず、冷れば惡いと蒲團の上抱きかゝへて久松が、介抱如在納戸より、親子の中も丸盈よ乘た盃銚子鍋運ぶ久作、おゞい、やつぱり寢てゝ居やらいで、したが島臺のおいかゝり、世話事の尉と姥も新しい、目の見へぬゝ

目出度秀句し賞ぐこと目出たい次手よ、此嫁ゝ何所に居るぞい、おみつ〳〵と尻輕よ、立て一間を差覗き、出くすみをして居るゝ、夫でゝ果ぬと手を取て、サアく嫁の座へ直つたり〳〵、エ、トキコ一家一門着の儘の祝言よ、改つた綿帽子覆としからふ取て遣と、脱すはづみに笄も、ぬけて惜げも投島田、根よりふつゝと切髪を、見るよ驚く久松お染、久作あきれてこりやどふじやと、いふ口おさへて、コレヤとゝ樣もおふたり樣も、何にもいふて下さんすあ、最前から何事も殘らず聞ておりました、思ひ切たといいしやんすゝ、義理よせまつた表向、底の心はお二人あがら、死る覺悟でござんしよがあ、ヤ死る覺悟で居やしやんす、嗅樣の大病、どふぞ命が取とめたさ、わしやをふとんと思ひ切た、ヤ切て祝ふた髪かたち、見て下さんせと兩肌を、脱だ下着ゝ白無垢の首にかけたる五條袈裟、思ひ切たる、目の中よ浮む涙ゝ水晶の、玉より清き貞心に今更何と詞さへ、涙呑込、呑込でと

たゆるつらさ久松お染久作も手を合せ、何にも云ぬ此通ぎや〳〵、
エ、女夫よゑたいばつかりに、そこらあたりよ心もつかず菩提の花をち
らしてのけたい皆おれがどんおから、赦して呉も口の内、聞へ憚る忍び
泣アア、冥加あい事かつゑやります所詮望みゝ叶ふまいと思ひの外祝言
の盃する様におつて、嬉しかつたゝた半時無理にわしが添ふとす
れば死ゑやんすを去りおがら、どふ盃が成ませふぞいあ、おみつの何を
いやるやら、女夫よおりやるを此母も、悦びこそすれ、何の死の、ノウ親仁殿
ワシヤ、ワイノ迚も此世ゝあい縁でも、せめて未來ゝ、アイヤ未來迄もかゝらぬとい
ふ、盃さそと立上り、口よ唱名ぶつ〳〵と佛檀明て取出す花瓶の松に鶴
亀もあの世を、契る心の島臺、〳〵斯して成と盃さすのが、せめてもの心ゆ
かしエ、云たい事だらけぎやけれど、此やうな座敷には、たべ付ぬ此親仁
三ゝくどふゝ云ぬが花嫁、一つのんで久松へアア、目出たい〳〵、ばいる嘸

かし嬉しかろ、ナ、嬉しい段かいの、一世一度の娘が曠、定めて髪も美しう出來たであろ、さき笄よ結やつたか、イエ、そんあら兩輪か、ナ、兩輪共〳〵、思ひがけあふすつぱりと、ヲいやさつぱりと能出來たいいの、ナ、親仁殿の言ゑやる通り、自慢ゑやあいが髪ハ大てい上手ゑやでざらぬ、ホンニ前方大坂行の土産よ貰やつた薄の簪、けふの曠にさしやつたかや、着物ハ取て置の花色加賀の裾摸様それか、ヲイ、それ着て居やるか、ヤイナ、ナ、吾儕にハよふ似合ぞいの成ふ事あら鉄漿付て、顔直しやつたおとあしさを、たつた一目見て死だら、善光寺様の、御印文にも勝つて、未來ハ極樂往生、ホ、〻、わしとした事が、目出たい中でいまハしいと、久松必氣よかけて、たもんあやいのと子に迷ふ、暗き目盲に夫ぞとも、ゑらず悦ぶ母親の、心を察し誰〳〵も泣聲せじと嚙る、四人の涙八ツの袖、板並八ケの落し水膝の堤や越ぬちん見聞つらさに忍び兼、お染ハ覺悟の以前の剃刀、あむあみだ佛と自

害の躰、久作あいて押とゝめ、娘ゆ何が不足で死るのじやと、聞間違ふて娘ぞと、母ゝ驚おみつ待て〳〵と這寄て、探る手先に五條袈裟、此袈裟といひ此つむりどふして髪を切たのじや譯を聞して〳〵と、せけゞせく程咳のぼし、病苦よ惱む母親を、見るに娘ゝ猶悲しく、嘆樣とらへて下さんせ、添よ添れぬ品よあり、わしや尼に成たいあ、〳〵そんあらさつきにから母が氣を休樣爲ティノ來世の緣を結ふ盃、此世の緣ゝ切て有ゝいの、尤しや〳〵、そあたゝ見へぬがいつそまし、傍でまじ〳〵見て居る心推量してたもいのと、云聲咽に詰らせゞ〳〵其悲しみをかけるのも此お染から起つた事死るがせめて身の言譯、イエ〳〵、死ねゞあらぬ此久松、わしが先へと欠寄を、久作剃刀引たくり是程いふても聞入ず、是非死たくゞおれから先へ、物の見事よ死で見せふか、爺樣が死去やんすりや、わたしも生てゝ居ませぬぞへ、娘出かゝやつた、むさい在所よ育

つても貞女の道を辨へて、よふ尼にありやつたのふ、そてよでざるが噂に聞たお染ゐか、お前ゐや久松を殺しとむをいばつかりよ、蝶よ花よと樂しんだ一人娘を尼よして、出かしたといふ心の中思ひやりが有あらぺあせおがらへてい下されぬ、折角娘が志無足にするとい胴欲とこらへし涙、一時よわつと計りよ取乱せぺ、道理ぞや〳〵、ぞふ有ても死たくぺ、婆も娘もおれも死る、三人おがら見殺す氣か、夫い、思ひとまつて下さるか、但死ふか、サア〳〵と三方が、義理と情と恩愛の云ゑ木よかゝる久松お染、死る事をへ叶いぬいか成過去の報ひぞと前後正躰、泣倒れむせ返るこそ道理おれ、久作涙押しぬぐひ、ぞふやら斯やら合点が行たそふお、嘸母ゐが案じてぞらふ大事の娘御ゐ者に、イヤそれにい及びませぬ母が慥に請取ましたと、云つゝ這入ぺ嘸樣、ハアはつと斗よ詞おく差俯けぺ、コレ〳〵お染野崎參り仕やつたと、聞てあんまり氣遣ひ

さ、アイヤ氣慰みに能からふと跡追て來て何事も殘らず聞た、夫婦の乘の深切かみつ女郎の志最前からあの表で、わしや拜んで斗居りましたわいのふ、サア觀音樣の慈利生で怪我過のおかつた嬉しさ、是から直にお禮參り、ホンニ是いさもしい物あれど、慈病人への見舞の印、麁抹おからと詞數云ず出過ぬ杉折を、供の男が差置い、ヤア〳〵冥加をあいお見舞戴きまするとと取上る、手元はつれて取落せば、中よりくいらりと以前の銀、ヤアさつきに渡した此銀を、チヽ、表向で請取たりや事い濟、改めて尼御へ布施せめて娘が冥加じやいいのふ、言譯が立からい久松も元の通り、戻つて目出たふ正月仕や、取込の中長居も不遠慮娘もおじやと手を引て、表へ出れば久作を門送りして、是いヤア何とお禮をヤまさせふやらお辞宜致すも却て無躾せめてものお土産に、折て置た此早咲、めてたい春を松竹梅とお家も榮へ蓬萊の餝物、幾久松が御奉公大事に勸めて此恩忘れぬ證と差出

せば、心有けあ此早咲、譬て云ば雨露の惠を請ぬ室咲ハ蕊も早し香も薄い盛りの春を待といふ二人への能教訓、殊更内に口さがあい者も有ば何角に遠慮せねばならぬ幸わしが乘て來た、あの竹輿で、コレ久松、そあたハ堤お染ハ船、別れ〳〵に逝るのが世上の補ひ心の遠慮、左樣でござりまする共、お志ゑや、乘て逝よや娘ハ船へと親ふの詞に否も云兼る、鶯の片羽の片〳〵に別れて、二人ハ乘移れば、そんなら久松もう行きやるか、來る正月の數入を、母も必待て居る、兄樣お健でお染ゐ、もふおさらば、と詞迄早改まるおみつ尼哀を餘所にみあれ棹船よも積れぬお主の浮恩親の惠の冥加あい取譯ておみつ殿斯成くだるも前の世の定り事と諦て、お年寄れた親達の介抱頼むと云さして泣音伏籠の面ふせ、船の中にも聲上て、よしあいわし故おみつゐの縁を切したお憎しみ堪忍して下さんせ、アヽ、譯もあいお染ゐ、浮世放れた尼ゑや物、そんあ心を勿躰あ

い短氣起して下さんすな、娘が云通死て花實ゝ咲ぬ梅一本花にならぬ樣に、めでたい盛りを見せてくれ、隨分達者で、イヤ〳〵お前もは無事で、お袋ぬもお娘にも、さらば、さらば〳〵も遠ざかる船と、堤ゝ隔れど、緣を引綱一筋ゝ思ひあふたる戀中も、義理の柵情のかせ杭、竹輿に比翼を引わくる心〳〵ぞ「世ありけり

下の卷　長町の段

鬼ゝ外、福ゝ内、打納めたる日暮から、賣を欺く長町の夜見せ賣物家ゝの春を請取賃づき屋、賑ゝふ臼取杵の音、とん〳〵敏乍せつきゝくる、下女が丸顏とり粉ぬる、鏡の大小子持かゝ、分相應の年始め實神國の去るしあり、せゝしい中で油屋の小助ゝ肩に風呂敷包、ふら〳〵來る餅やの門、勘六爰ゝか、けふゝ年越で一日の休み所を透さず賃搗ゝ迄雇ゝれるとゝ、きつい精の出し樣ぞやな、イヤ是もせふ事なしぞやゝいの、何が寐る

り宿ゝあし、年中の飯米ゝ温飩か餅か、五父取の代五六百、此雇ひ賃で帳消すのゑやが、貴樣の世話でそちの内へ、絞りに雇ゝれて行に付、いつぞやの座摩での仕業、久松めが ゑろ〳〵 とおれが顔を眺めおると、どふやら氣味が惡いわい、扨日頃ゑ似合ぬ正直な事云わい、貴樣を絞りに入れて置のも、久松めを目論にかけてぼい出す仕業の種油、あすゝ大晦日仕廻仕業ゑや朝から來てたも、今夜ゝ槌の子でも抱て寢る晩、そこて我等も隙貰ふて是から色の所へ行ゑや、ゑ、そふかゑて月代もすつぱり、ゑ、こりや障つてくれゑ、たつた今床で結立ゑや、ゑ、それゑ又其風呂敷ゝ何ゑやぞい、是か、こりや立に行大盡衣裝ゑや、内からゝ着て出られぬ故爰迄小出し羽織ゝ則此隣りの古手屋に誂へて置た、ヤコレ此間の茶縮緬仕立て有かゑ、ヤ何ゑや、もふ遲付出來ます、エ、遲い〳〵、今夜色ゑ見せに行のゑや、爰から直に着かへて行、何でも今夜ゝゑら立ゑや、勘六貴樣も辨慶

に連て行、其代おれを旦那あしらいにしてたも、コレ必久三といふまいぞと、太平樂の下稽古、隣りへ入ゝ立替る季もあら玉や往來の、足も春めく祇園道、主持身よゝ年德の惠方參りもそこ〳〵にせゝしう戻る久松が、摺違ふたる提燈の印に目早く見返る女、ア、〳〵お若いの、ヤイどおたでざります、イヤ卒爾お事ぎやが若お前ゝと、云つゝ明りよ顏見合せ、久松樣か、ヤア乳母のお鹿、是ゝとゞつたり小提燈、ヲ、あぶおい灯をけさずとつくりと久しぶりの顏見ませふ、半元腹さ ぎやつてから、お果あされた丈太夫樣にとんと其儘、ヲ、きつとした能殿ぶりやの、此間のあ定めて見やぎやんしたで有、乳母が日頃の念願叶ひ、今度殿樣にお目出たで、多くの科人も沙赦免あさるゝ折から、一ッの功さへ立あらゞ丈太夫が餘久松、和泉の本國へ歸參さするゝ此時、其功の立樣ゝ、先達て紛失の吉光の守り刀、則此度のお目出度よ正月三日鎧開きにお錺りあさるゝ、それ迄に

其刀を詮義して差上おゞ、跡目相續相違有しと、浮家老中の仰渡され、まだ年も有けれど、親方樣へ暇の願ひ、聞屆けが有たかまだか、年越に健お顔見て、嬉しうござると餘念おき、眞身の詞よ久松ハ、今更國へ逝れぬ譯明ていわれず、夫ハ嬉しいが、師走の内もけふあすに成て、余りせハしい急お出世、そふして其吉光の刀ハ手よ入たかや、さればいお、大坂谷町の質屋よ有と聞た故尋よ往たれバ、其質ハ半年前に流したといふ、彼の刀の失た折からお國を出奔して鈴木彌忠太、こいつが盜んで立退たハ云れて有、其質の置き主の名を尋ねても云ぬからハ、此質屋も相對と思ハるゝ、ヲヲ何といやる、谷町の質屋とハ若、山家屋とハ云ぬか、それ〳〵、其山家屋佐四郎、彌忠太ハ此長町に居るぜお、慥お手かゝり有からハ必氣づかひさゝやんすお、まちつとの所ゝや煩ふまいぞ、コレ和子、ハ、ヲヲわしとゝた事が、やつぱりぼん樣の樣に、追付千五百石の若旦那、立派お馬よ

乘まして、はいえい同勢お國入、お目出たふござります、何から何迄乳母の深切孤子に成久松けふ迄命恙ないも、そなたの兄久作殿のお情、其刀の質請にも、定めて金が入ふがの、是いたしよも成まいけれど、重〳〵世話の恩返し、万分の壹歩七つ八つ守袋を明て出す、はづみよ落るお染が起請、隱すを押へて、コレヤ久松様、奉公人に似合ぬこがね、誰に借えやつたぞ、合點が行ぬ、イヤ〳〵氣遣ひな事えやない、此壹歩ハ小遣ひよせいと伊察人夫が下さつた、其書いた物ハ大事の守り、こつちへたもいの、イヤ待えやんせ、ハテ情深い伊察人夫えやな、シタガ余り親方の情過るもよしあしの、あよハ兎も有、えほらしいお前の志の金預つて置ませふ、此書た物ハ熊野の牛王か定めて大切な守りで有ふ、神様の名の書た物、そゝこえうしてハ今の様についい溝へでも取落せば守りが却て其身に祟るこりやわしが預りますとちらりと見付て懷へくろめる乳母ハ守り神胸よ納めて、久

杯樣あすい私もお家へ參り俱〳〵に暇の願ひ、親方持じやアア早ふ逝しやんせ、諸事い翌たと言殘し立別れてい立留り、コレヤ必國へ行のじやぞへ、ア、どふやら濟ぬ顏付じや、ほんに又油斷のあらば、いつ迄もぼん樣じやと思ふて居る内、終坊の親よあらんすあへ、コレ怪我さんすあ和子、いとしや仕あれぬ奉公をと、昔思へバひとしづく涙、催す師走空見返り〳〵

「別れ行、往來人だへ長町の、夜店の賣聲、小歌物眞似、なまいたんやは、厄拂ひましよ、落しまえよ、目出たいあ何ぼうめでたいあ、こあたのは壽命ヤそふあら、鶴い千年龜じやあいか、三か六かと一所へ、つぶやき夜の小働き、ナント能仕事したか、ひがだいの幻妻、侍に合て物いふ間に、あぼ引た、結搆あ守りじやあ、中よい一歩書た物も入て有、日本橋でてうふせふ、アレ〳〵又幻妻がこつちへうせる、かいせ〳〵とバら〳〵よ、ちる三人を見付た勘六、跡をえたふて飛で行、非道の刀遁世を、忍び頭巾の浪人に、小腰

かゝめて付添お庄、うさんお者と思し召、お名をお包みあさるゝゝ尤、一昔過た事あれゞ、お見忘れあさる筈あれど、此方よりよふ覺へてあります、石津の浪人鈴木彌忠太樣、其時の同家中相良丈太夫が家來、三平が女房のお庄でございますいあ、ヘヱナ成程とふいやれゞ見請た樣あシテ此彌忠太よりゝ何の用、ハイお願ひがでざりますあなた樣が國元を、お立退あさるゝ、折節紛失致した吉光の刀、其誤りで主人丈太夫家退轉此刀が今でも出れゞ、主人の跡目相續致す、承りれゞ當所の質屋、山家屋よ質物よ成、限月ゝ切たれと其置主さへ知たれゞ、質札を買取、此方へ請戻したさ、段々心を碎いて金子十五兩、才覺致して參りました、ぞふぞ其金で質札を、私へお賣下されふあらヤコレ〳〵何と云めす、スリヤ其質の置主を、此彌忠太じやと聞召つたか、イヤ左樣でもでざりませねど、夫に又鹿相千万其置主ゝ則盜賊、さし付て身共じやといやれゞ、此彌忠太を盜賊といふも同じ事、

女と思ひ聞流せゞ、慮外至極とかさ押よきめ付る、イヤ全左樣でハあけれ共若あなたが此置主を、ハ存あらゞお去らせなされて下さりませいを打けして、ア、師走の果に左樣の事、相手にある馬鹿が有ふか、とハいふ物の、侍ハ相手尋てやるまい物でもあいが、其詞偽りあくゞ十五兩の金子、そこに持て居召れふの、イヤ旅宿に預けて置ました、ム、手前も只今急用で他所へ參る、明日參つてとくと談せふ、お手前の旅宿ハ何所だ、ハイ、こんな事も有ふかと、則旅宿の所書を認めて置きましたと、何心なふ懷へふつと氣の付守り袋、搜せゞ見へずはつと惚り、イヤコレ身も只今ハ心せき、重ねて緩りと早參ると、袂ふり切急ぎ行、ア、是ヤ今暫く、エ、折もおり今の守り若人ゑ拾ハれてハ久松樣の身の大事、それも氣づかひ、今來た道へ、イヤ〳〵刀の詮義ハ延されぬと、我身ハ一つ二筋道、忠義一途に追ふて行、勘六に去め上られ、手をすりでうの痛い顏、ヤ出しまず〳〵、出しあがれ、今働

らいたゝ此守り、壹歩が八切、其儘でござります、まだ是斗ぢやない、何も角も吐出しおろと、せです後ろゑ立聞彌忠太、ヤア、わりや勘六ぢやないか、ヤ、彌忠太様か、彌忠太かとゝ横道者、うぬよふ身共をやつたな、ヤ、ヤ、何ゑも云ぢやますな、コレ此紙入ゝお前ので有ふがな、何がスチチお前のぢや〳〵中にゝぢつかり、是が日外の入かへ、ナ、ゑいかへ、ふ、〳〵、いかにも身共が紙入よく盗んだな、まだ〳〵、コレ此印籠ヨ、それも身共がのぢや、イヱ〳〵、其二色ゝお前様のぢやでざりませぬと、いふを云せずどう盗めと、二人が寄て踏つ蹴つ、いがみの物取大盗人ゑ、命から〳〵逃て行、二人ゝ跡を見廻して、彌忠太様、先度の一貫五百目ハ、丁半でころりと仕廻ふて、ちぎ文もおゝしまさぬ、夫で算用すつてゑさんせ、エ、ふといやつ、そふして此紙入にゝ何程有、マア、こりやはした錢じやぞよ、うまい人じや銀ぢら何のこおんにやらふ、マア〳〵腹立さんすな、此守り袋にゝお性根が入て有たれど、そり

やおれが飲で仕廻ふて、跡に書た物が有、慥に證文と思れるゝ、かりや讀ぬによつて、こゝ樣に進上すると、渡せバ取て夜、店の明り、こりや是、お染と久松が起請、よい物が手に入た、油屋へ仕かけてぐずりの種、コレ〳〵そんあら、二ッ山じやぞやと、何でも取付餅屋の隣り、待た暫く、此小助も其仲間へ、入て貰をとぬつと出たる男ぶり、久三のどんざ引かへて、一丁目脇指やつ仕立、當世風の旦那衆天窓、彌忠太樣何とゑらいか、能い事聞た、祝ひよ今夜ハ我等立ゑ、や〳〵そりや過分あが、未一口設の手筋、片付て跡から參らふ、さ、此勘六も今一臼取てから貴樣の餅搗祝ひよ行ふ、そんあら勝曼で待て居る、打てくれ、シヤン〳〵最一ッせい、しやん〳〵、祝ふて三度おしやしやんのしやん、しやん〳〵しやんと引別れ、葭簀も折から能時分、行んとせしが立とまり、ハア併と、久ゑう行ぬ馬場前の、田中屋へ行ふか、ァひや〳〵きやつが所はぶさ打て有、それよ勝曼の色めが醜に、生姜入て

待て居る筈、先此方へと行てい戻り、ア、可愛や髭剃のおふさが借錢の咄し、正月屋のぜんざいを、お前と氣入ずよ喰たいといふたが、是も行たし、醯も呑たし、どふせうか、斯勝曼六道の、辻に待たる以前の丐共、こちらが仕事の、邪广玄をつた侍めいソレそいつじや、たゝめ〳〵と三人が、有無を云さず引立る、夢見た樣な、小助が難義、悔りかけ出す勘六を、そいつもぐる玄やと、掴み付、心得立臼とり〳〵の、餅に片足踏でんで、べつたり尻餅あも重ね、運の杵臼、掴み付、頼額げんのみ五文取、起上つて又ころ〳〵、取粉よまぶれて頬眞白どれがどれやら味方同士、ぶつやら踏やら暗紛れ、跡をも見ずして「走り行

油屋の段

難波詠めの、其中に名に大坂の鬼門角、油の玄め木引玄めて異見の種も後家育、山家屋へ嫁入の日歡せまりし大年の、拂ひい宵に片付て春を壽

く注連飾り松の盛砂、高盛の飯椀つらりと仕事仕の夕飯時ん賑ん しし、
ア、ふさつ殿遣ひ立ましたけふん大晦日一年中の仕事納め、早ふ仕廻て
知行米ん マア腹へ取込だ、此勘六めんどつちへうせた、めんよふ悪い癖で
飯時に飯ん喰ん ず、又酒買にうせおつたか、あいつん大方さか子よ生れ
おつたであろ、イヤ〳〵酒喰ひの筈ぢや、あいつん薦かぶりから成上つたや
つぢやげあと、傍に居ぬ者譏り合口の悪いんかけ徳利提て外から、ヤイ〳〵
勘六が事譏り上つたん長八めじやあ、イヤおれぢやあい久兵衛じや、イヤお
れぢやあいぞ〳〵、こゝやかましい、どいつこいつの用捨んあい皆覺悟し
てけつかれ、人の銭かつてん呑まいし、おれか酒呑だらうぬらが足でも
ひよろ付か、あんのいのちつと傍あたりが熟柿くさいばつかり、ぬかし
おんあ惣躰油絞りといふ者ん繻絆一つて働く商賣、取わけておれん寒
の師走も日の六月も、年中裸で暮す故だはの勘六と異名付た男、此仕事

せいでも能錢を設るけれど、打入打上る、げがお身に付た例がおい、儕らん錢がおいから得喰いぬの玄や、おれが此嗅をかゞして、こまずを有難いと思ひけつかれ、一盃入て跡で飯も喰のじや、此盛て有おれが飯にどいつでもはでさいたら腹袋引裂ぞと、何でをふじつく鬼の面、はつた腕ん惡鬼の看板、障らぬ神よ祟りおし、仕事の賃さへ貰ふたら逝で早ふ年取ふ、ヂ、どふおと勝手に仕をれ、おりや逝ふにも盈いおし此酒の勢ひにぐつたりといつそ來年迄一寢入えてこまそと、裏へ轉込强者よ、搆いぬ手間取お家迄へ能やうに、此久三の小助いけさからとんと顔見ぬのふ、ヂア、夕べの年越からまだ戻らんせぬ、ム、年越からと有バ何所の豆を喰よ往かれた、大かた納屋の下の影裏豆、こちも逝で噂の煎豆、お福い内に待て居よと住家〳〵へ立歸る、木綿でもおく絹でおく、せふ事おしの山繭紬、久三小助が里通ひ勝慢の、茶屋で夕べから、えゆつぽく酒の二百醉

とそのお山に送られて瓦屋橋にふつと氣が付こりやうかゝ來て早とちの内玄や、もふ逝でくれ〳〵、サア最前からいね〳〵いひ玄やけれど、内かたが見たさに付て來た、ア、コリヤ覗くお手代衆が見や玄やる、イヤサ手代共ゝ大事あいけれど、女房が見たら悋氣する、ちやつといね〳〵、そんなら旦那樣かた三日逸へなへと、ぴん玄やん歸るを待兼て、番部屋の物かげて、着かへる衣裝繻子の帶、上着くる〳〵、すつぽりと元の久三の尻からげ、急がし顔で竹藪、夕部の野等のはきだめを跡から拭ふふき掃除手桶の切水ぱつ〳〵と、浮名ゝ餘所ゝ立ど共玄らぬ久松小隱れゝ悋氣口苦も聲高ゝいゝれぬが苦の世界あり、お染ゆそりや何おつ玄やる、云号のおみつさへお前にゝ見かへぬ私、それゝ何の上氣らしい外の色事所かいな、イヤ〳〵何ぼそふいやつても合點が行ぬ、是見や久樣と書たお山のあがさい〳〵來るゝ、どふでも茶屋狂ひ仕やるに極つた、コレ、又疑ひ深い

何所のやつがそんな狀誓文わたしが茶屋へ行たら、西から日が出る東堀、いつこ川筋師走の懸取、田中屋でござります、中拂ひの殘り拾貫五百文沙算用頼みます、ムム、田中屋といふハ覺へぬがこな樣何賣たのじや、イエ私ハ馬場前の茶屋でござります、久樣にお目にかゝれバ合点、女郎衆の取かへが六貫三百殘りハ酒取肴、ア、是めつそふな、此久松馬場前とやら終に往た事もない覺へない〳〵、ハテこな樣のゑつた事ゑやない久樣に逢して貰を、サア久松ハわしゑやハいの、イヤ久松ゑやない久と、ハテ此内の旦那殿、旦那ゑ逢バ分るこつちや、イヤ〳〵そんな名ハ爰にハない、ハテ扨、コレ旦那の口から直に聞た、おれが名ハ油屋の久三郎とおつゑやつた、久ハひさといふ字、そこでこちの島でハ、久樣といふハいの、ヤ、そんな事こちや知ぬ、ゑらぬゑや濟ぬと聲高に、見ぬ顔しても居られぬ小助、門から、手招き、コレ〳〵爰ゑや〳〵、久三郎是ゑおる、イヤアお前ハ久樣旦那樣かと、物

りあたふた門口へ、不粋あやつでゝ有内へ這入といふ事が有物かい、お目に懸らにや濟ぬ出入衣やがお前ゝ薄いお姿で、そして侍自身に門掃とゝこりやどふでござります、サイヤイ、大勢の人をつかふ者ゝ旦那から斯して見せねゞ廻る物じやあいわいやい、ハア聞へました時に聞へませぬゝ日外からお風が替つて勝曼へお出あさるゝげあ、そして是程の御身上ゑ私が纔の懸を、サア〜やるゝいやい、ソレヤア三歩取て置、跡ゝ後ゑとつちから男共に持してやる、それも面倒いおれが直に持て行、そりや有がたいそんあら必違やせぬゝい、是迄算用せずに置たゝ、お山めがいき方が悪さゑ肝癪でわざと引ずつたのじや、イヤそりや旦那お道理あれどおやまの肝癪で呼屋を踏とゝ大きあつぼ、ソレ重井筒にもござります、踏あ呼屋に科もあい、火燧にたんと火をいけて、待て居ます、くゝつとお立と、こそ屋ゝいいき〜、生玉さして、立歸る、ソレ小助殿、此間がしい大晦日

よ何處へいて居やしやつた、、前髪があまちよこざい置てくれ、久三と手代二人前の此小助、請拂ひゝ昨日去まふ、年越よ隙貰ふて戻ると直にはき掃除、此働きが目に見へぬか、イヤ〳〵そふ斗じやあい、あしたのせちの椀家具藏へ行て出してこいと、かゝ樣の云付、イヱ〳〵藏の出し入ゝ久三の役じやでざりませぬ、お氣よ入の久松、ほ寮人樣と連立て行きや、それでゝ詞に角が有て氣の毒、今のゝわしが云損ひ、サア いつしよよと傍輩の機嫌、取手をひつ去よあく、行あら行が邪广にあろがあ、あすゝ元日、大かた姫始めの取越お染ゆの藏の鍵、明ましてお目出たふでざります、ヱ、同じ傍輩で門口からお禮ヤ事さへあらぬ、此久三よ何が成と、げたい惡口傍輩悋氣ぶつくさ「つぶやき立て行年一日もくれかゝる、四十の浪も世話よよる乳母のお庄ゝ久松に尋ね、大坂油屋の、中戸に音あい、頼みませうやあたと内より出合頭久松樣かヱ、乳母か能來てたもつた、ア〳〵爰へ

と深切ゝ替らぬ中の行燈の影男が先へ箱挑燈ともし立たる禮衣裝、上下ため付山家屋佐四郎歳暮のお禮とつゝと入、コリヤ喜八よ、今夜ゝ是で夜が更る、夜半前に迎ひにこい、お勝殿ゝ奥よりでざるか、ハイ左やうよりやませふ、暫くお待とつい立て、行も見送る主思ひの乳母が氣の付たばと盈ほんに幸能折から、今日もあなたへ參つてお尋りさにやあらぬ譯彼吉光の守り刀、アヽ是一昨日もりや通り、其刀ゝ手前質よ取たれ共、もふとふよ流れましたと、サア其義ゝ承ゝりましたが、其置主ゝ、若鈴木彌忠太とゝりやませぬか、イヤもふいかい事の口數、すゝきやら、鰯やら、此方覺へゝ致さぬと、塵灰付ぬ詞の擂、お茶上ませふと久松が、差出す茶碗、引たくり、エヽ小ざたゝるい丁稚ざやあ、手いらずの染茶碗、ちよこ〳〵破そふあ頬付、茶碗のかゝりに親方の前で何もかをけつ破てこます、げふゝ後家よ逢てめつきしやつき、嫁入の廻るをほうずが有、結納おこしてから幾月にあそ、今夜中

にお染を渡すか、そふあけりや結納の證の脇指一腰金拾兩取戻してこちから變改其代に又借て置た百廿貫目毫迄算用して取のじや、サア案内仕おれ丁稚めと、しやちこばつたる麻袴疵持、足の穂に顯れ問ぬに夫とお乳の人、そんあら和子二階で待て居ますぞへと、心殘して立て行、藏からそつと小助が惡智惠、小判の包封押切、先拾兩忝い、此盜人を久松めに、そふじや、〳〵と一人笑、人に難義を塗文庫の中へ目錄蓋びつ去やり去めたぞ〳〵、時に此金、ちつとの間、何處ぞに奥から小助殿〳〵と呼立出る下女のおさつ、コレ〳〵小助殿今奥で山家屋の旦那樣とお家樣と、結納を戻せとやつさ返しつ其中よ取交て、結納の金が見へぬといふて、大ていの詮義じやあい、サア〳〵ごんせ、さ、そこへ〳〵、ヱ、どこへ隱して置所に、事角折敷飯椀の、高盛へつゝ迄小判のでもく飯、上から押付そ去らぬ顏、打運て行奥から口、目から鼻へ抜目のあい女主、後家よ負ぬい銀の利の、か

さにかゝつて聲山家屋、お勝樣結納の證據白に戻さふと云しやつたから、今更否ゝ云れまい、サア〳〵戻して貰ひまゝよ、サア今お聞あさるゝ、通太切よして簞笥ゑ入、ゑつかりと藏ゑ入て置た結納の金拾兩、今に成て見へぬと云ゝ、コレおかゑやれ、いひがゝりで戻さふといふたれど、結納戻せゞ百廿貫目立にやあらぬ、所で何あと引延す、てれんゝたべぬ、八にとそ寄山家屋の佐四郎、一保が講釋三年聞た男ゑや、そんあ斗畧に乘てたまる物かいの、ヵ又嘘であくゞ其結納お出しあされ、サア〳〵何とゝつゝかゝる主の當惑取分て氣の毒餘る久松、私が差出がましけれど、大まいの銀さへ立ふと有お家泡、纔拾兩の金を惜んで、何の眞似合おつゑやらふ、油屋商賣ゝ大勢の仕事仕、毎日入込事あれゞ、誰がわざかゝゑられ共失たにゝ違ひあし、私共も銘〻身晴、俱吟味して今夜中ゑ、急度お目にかけませふ、お疑ひ晴されませと、挨拶する程むつと顔、何がお小みづをくり出

す勘六、おうへよどつさり大あぐら、コレ丁稚殿、貴樣ゑぢいお事いふの、爰の内に金が見へにや、仕事仕のおいらが盗んたのか、イヤ〳〵そふでおいわいの、イヤそふいふの爰や、仕事仕が大勢入込うさんおといふからい、絞り仲間を盗人といふの爰や、殊よおりやけふ頃日の新面爰や、猶以て耳に立ぞ、但し何ぞ證據が有か、ロ證據もおいに盗人呼いり、けたいが悪いぞ、いま〳〵しいぞ、ア、是〻聲高にいやんおいの、イヤ〳〵とめやんお小助、あのせんまめ仕樣が有、サ、尤爰や〳〵、わがみの立ぬ樣にはせぬ、ア〳〵待ちやいの、イヤとめやんお〳〵、サア〳〵よいわいの、わがみの立ぬ樣よいおれがせぬ、やかましいやんな、〳〵古町爰やいいの人が立いいの、勘六い正直者爰やさかいゑらふ腹立召る、ハ、ヽヽ、イヤコレ久松、ちよとお爰や、サア云てえまやいの、いへとい何を、ハテわがみが金盗んた事を、コレ〳〵小助殿、そりや何いふの爰や、覺へもおい事を、ハテ扨もふ叶いぬ事を、其眞顔がいや爰やいい

の證據の出ぬ中、奇麗にいふて仕廻ふたが能からふぞや、おれよいや〳〵、エ、知ぬわいの、ヤ實正覺へあいか、エ、氣の毒あがら、證據出さずば成まいと、久松が手習ひ文庫引さげ出、こりや是われが文庫、アノ佐四郎樣から、結納の證に付て來た目錄、我部屋の入物の中に、コレ〳〵入て有たが遁れぬ證據ヤ天命ぞやの、是でもわかみが盗まぬかと、差付られても覺へあき、身の災難に詞あき、久松が胸づくし、取て引すへ勘六が、イヤばかめ、うぬが盗んだ金を人にぬつて、よふおれに紋付たあ、コレ〳〵勘六やかましういやしあ、金の有所ぬかさねば、ぞづきすへて云すの云や、エ、ぬかしあがれと責ぜつくう、お勝わ聲かけ小助待ちや、ヱヽお家様、あせおとめあされます、ヘテ下人といふても人の子、疵でも付たら何とする、殊に其金の盗人、急度久松にわ極らぬ、アノ是程しれた證據の有に、サレメヽやい、其久松が文庫わ、明て有たか鍵がおりて有たか、金盗む程の者あら、其目錄わ破つて

捨る筈の事を、我科のしれる樣よ、わざ〳〵我文庫に入て置て、しかも蓋明て置そふな物か、但し又錠がおりて有たをそなたが明たら、人の箱の錠捻切ゝ盗人の行作ゃ夫ならそちにも疑ひがかゝるぞよ、ゃそれゝ、其樣に手荒ふせずと靜ゑしても詮義ゝ成と、ざつくり詞の角屋敷納めた後家に、いらつく佐四郎ゃアそりやゃ勝殿最負の捌きじや、現ゑ知た盗人の久松、そつちで詮義がならずゝ、町内へ斷つて代官所へ引ずつて行、小助しめ上て詮義仕やいの、ハイ〳〵合點と立かゝる、コリャ主の詞を背くのかと、主命流石ゥぢづく腕、小助せくゑ、此丁稚めゝ勘六に任せて置と、久松が前髪引付平手でひつしやり、起直つて、コレ勘六、こりや何とするのじや、大ずりめ、小助ゝ傍輩だけて手ぬるい、其日雇ゝれの勘六、ぞなたゑも遠慮ゝあい、金ゝき出さにや、商賣の油のおり食ゝすぞ、胴性骨の油糟、絞り出しても云さゑや置ぬと、土間へ引立踏落され髪もばら〳〵、あふ涙こた

へ兼て欠出る乳母、マア〳〵待て下され待ていのと、庭に欠かり、コレ久松樣、お前の身に曇りのない云譯わしがする、ほんに〳〵今でこそ町家の奉公、筋目正しい和子よ、そんなさもしい心が有ふか、無念よござんさよ、最前からお前方、わしが口惜ふてならぬいなアと脊撫さすれば、ヽヽ何ぞやけたいなばゝが出た、でくにも立ぬ云譯せずと、今爰でだはの勘六が、盜人の政道するをよふ見て置、ぞやが醉醒で俄にぐつと壯餓あつた、飯一ぱい喰て腹丈夫にしてから、どふするぞ待ておれと、飯椀引出し箸取かゝれゝ小助ゝ惚り、ア、コリヤめつそふな〳〵〳〵、夫ゝマア何するぞいやい、ヤ何するといおれが飯をおれが喰のに、それが何でめつそふな、イヤサ夫ゝいかにもわれが飯そふなといふ事、サア、おれが飯ぞやによつて、ア、コリヤ〳〵〳〵其飯喰ないやい、妙な事をいふ人ぞや、ばかめを行ふのに隙が入といふのか、よい〳〵、そんなら飯喰〳〵やつてこまそ、一寶せめたら、白狀さすゝ攜

の上の箸と飯椀放さぬ勘六、こゝ是ゝ又情あいこゝ、こりや〳〵〳〵こゝ夫を下ゑ置、此飯ゝ喰されぬゝやいこゝ、けたいな、そりや又何で、サイヤイ金の盗人が云れぬ中ゝ仕業仕ゑも皆疑ひがかゝつて有、ヨウ若われが盗んだのあら、盗人に飯喰す法が有か、身の垢を拔た上で、跡で喰といふ事、こりや理屈云や、そんあらといつをふ云でいて仕廻ゝにやあらぬ、こゝ是ゝ大事のおれが扶持切米、物いひの付た飯じや、やつぱり爰に置て貰を、樣〻の事て食ぞめ云られる、おれが爲にゝ食敵、儕にゝ是喰ゝすと、割木引提立かゝる、勘六待ちや、家來の吟味ゝ主がする、雇ひ人のそあたが入ざる差出扣へて居や、うんあら小助が、イヤわがみも頼まぬ、こゝすりやこあ樣の直の吟味見物致そとつゝぱる佐四郎、いやといれぬ此場の表、頼みませう、小助表ゑ案内が有、小助〳〵〳〵どあたじやと、出迎ふ門口、兼てや云めし相けんを、互ゑ見ぬ顔空とぼけ、拙者浪人者てござる、此度有

付て國方へ參るに付、路用の拵へよ手誥り、お家を見かけては無心とゞ
て唯ハヤさぬ、實ハ身の差合せ、賣に參つた一品ちよとゞ覽下されと、懷
より取出す一通、淨土宗一向宗にハあけれバ成ぬ圓光大師の一枚起
請牘か正筆かハ、たつた一目ゞらふじると忽しれるお見知りの手跡、ナ
何と是斗ハ買つしやれずハ成まい天罰起請文の事此跡を讀ずに直を
付るが商ひの秘事娘ゝに買て進せられたら一生の災難を遁れる、守本
尊でゞさらふぞや、但しゞ所望よあいか、夫にゞさるお若人、其元にも
入用の物じやお求めあされい現當二世の起請文、イヤもふ〳〵有がたい
ゞ文章お望みあらバ、よんでお聞せヤさうかと、意地くね惡ふ鬼門の肝
先、ドレ拜見致そかと、立寄佐四郎ハ金神の、中からお庄が引取て一枚起請
買ました、わしに賣て下さりませ、ゝは不肖あがらと差出す、金包手よ取上、
とりや纔金拾五兩、こんお事でハ、夫ハ當座の手附、ゝ手附と有バ請取

た價ハ何程致さふと、わたしがアイ買まする今年ハ夫の十三年、此有難ひ
ぼ文章が、何と人手に渡されふコレ久松様、お前の親ぢ丈太夫様ぢ預りの
ぼ重寶失ふた科、あほう拂ひに逢のが無念さ、お覺悟の切腹、夫三平介錯
の上主人の退腹、お前ハ漸六ツの年、兄久作の在所へ預けわしハ國ゑと
ぢまつて、今一度相良の跡目相續の願ひ、ぼ家老中へ月〻の訴訟、其時失
た殿の重寶、此大坂の質屋ゑ有と聞たハお主の出世時と其爲に拵へた
此金あれど差當つた地獄の苦患遁るゝハ此一枚起請、其太切お事を何
共思ハ去やんせぬハ、親ぼの恩を仇ゑ思ふて居さ去やるから、コレ見や去
やんせ、妙譽西岸信士、俗名三平、こりやわしが夫の戒名、片時も肌身を放
した事ハない、お前の親ぢハ劍樹院等覺居士、其心でハ命日も、忘れてか
お居さ去やらふ、コレ此位牌の夫三平が、忠義の心を少しでも思ふ氣が有
あら、未來の約束、忝い御文章を反古ゑして、國へ歸つて命長ふ、家相續し

て鉦に樣に草葉の影からにつこりと笑ゐしまして下されと恨みも、異見を十分一明て云れぬ百千万、我子の樣に、養ひ君思ひ誥たる眞實の、母より深い大恩慈悲誤つた、〳〵、もふ堪忍して、〳〵、と歎けば涙ふいてやるあまいゐ乳母の習ひあり、歎きを餘所ゑ山家屋が伸欠氣、とりや盜人の詮義が來年に成そふあ、イヤコレ浪人、見た所があの嗅、跡金の才覺心先あい、手附限の事で有、いつそおれ買ましよか、イエ〳〵外へゐやらぬわたしか先約、跡金ゐ何ぼでござんす、惣高金ゐ五百兩エ、イ安い物じや、只今請取ふと、聞て今更ッと斗り、當惑顏を、見て取お勝、イヤ〳〵無躾あがらそりや出來まい五百兩あら私が買ましよ、今がらりに、渡さふ程ゑ、さつきの手附ゐあの人へお返しあされ、成程〳〵そふあふて叶ゐぬ所、めくさり金で大事の代物、買取ふとゐのぶとい女め、手附金、ソレ返すと投出す包み、お勝が取上、お侍樣、とりや最前の手附とゐ違ひましたあ、何が違つ

たイヤ違ひました、中ハ見いでもしれて有、大かた是ハ戎様の贋小判ヤ、そりや何か手前存せぬ、あの女が、おつゑやんあ、こりや最前の金でハあいわしがよふ見て置た、あの人が渡した金ハ反古ゑ包んでござんした、是ハ是白紙、包が違ふて有からハ、お前が内から拵へてござつたふきかへの贋金、正眞の金ハ懐ゑ有ふがあ、日外久松が銜られたもてうゞ此傳、是をたぐつて詮義ゑたら、何が出よふも知れまいと穴を見付た發明後家暗い仕業ハ油屋の、明りゑきよろつく化のかハイヤ其詮義ゑとちらの詮義、ドリヤ起請の正躰を顯ハしてお目にかけふと、立寄小助を勘六が、取て突退起請の一通、寸〳〵に引さいたり、コリヤやい〳〵、大事の證據おせ破つたこつちへおこせと云せも立ず、鎌ゞつさり片手投、コリヤ何ゑをると掴み付頬に飯櫓菩薩の罰、ソレ久松小判が出よふが、ホンコ丁ゞ拾兩、そんなら此盗人ハ、テ、こいつゑや、もふ通れぬハい、道理で飯おしみ仕をると思ふた、何で

も三ツ山の約束に、儕一人よい事せふとゝ去とゝ下心の悪いがさ、もふ此勘六魂が返つて、是からゝ久松が味方、何も角もいふて仕廻ふからゝ何所へ尻が行ふも知れぬぞ、もふ赦されぬと取付を、脾腹の當身久三郎、さう共云ず目を白黒の裏ゝ勘六が、みたのかゝりに山家屋も傍杖こゝがるたんぺ色、佐四郎様、拾兩の金子出しましたぞへ、持てお歸りあされませ、是でも私が盗みましたか、何のいの、正直正路あ丁稚殿、有所さへ知れたら持て逝には及ゝぬゝいの、そふおつ知やれぺ娘よも、云ぶんゝでざりませぬか、何の有ぞいの、そんあら嫁入の日限ゝ、春永に〳〵、長居致した、早ふ逝でいねつみませふとそこ〳〵よ底氣味悪ふ彌忠太も、そろ〳〵 表へ、侍待た、懐の金置て行、但し勘六が引出そふかゝ〳〵コレあの拾五兩ゝ侍文章の代金、深い志の金、お庄殿へゝわしが返す、そつとも波風あい様に、わざと何にも云ぬぞへ、身共も何にも云分あいと、

歌祭文

強い顔でも胴震ひ肝を潰す種よ油屋の、辻から横に逃歸る、お庄ゝいそ〳〵、結構あの家なのに了簡で久松樣の明りも忽、打てかゝつた勘六殿、急に能過て合點が行ぬ、コレ氣遣ひせまい此勘六、久松殿の肩持ねばあらぬわけゝ是見て下され、腕に卒都婆の入痣妙譽西岸信士、ホンニ此位牌の戒名と、合たゝ不思議、母者人健でござつたの、とお樣の子の三之助でゞんすゝいの、ヤテ別れたゝ十四の年、見忘れさんしたも尤斯いふ髭頬におつた物、いつたいがちいさい時からいけずで有て、倍臣の鈴の分で、歴〻の家中の子供衆に礫打たり天窓はつたり、手討にもせよやあらぬ所を、親父樣の慈悲の勘當、間をおふ死しやつたと聞てがつくり、始めてちつと人間の魂が出來たれゞ悲しや體がみだれ同然、親の墓へさへ畫ゝ得參らず、夜の中に寫して來た戒名、命日に坊樣呼ふにも、宿あしあれゞ佛樣ゝ猶あし、せめて親の大恩を忘れぬ樣に彫付た、此腕がわしが佛檀、置所が惡

さに手を合してゝ拜まれず、毎朝片一方の手でお禮ゆまずいいの、餘所あがら聞バ彼主人丈太夫樣、御切腹あされた元ゝといへバ、紛失の吉光の刀、此大坂に質物に入て有由、エ、是を請戻してお家を立れバ、お主人思義、親父樣のお位牌へ、是ゑ上とす手向ゝあいと思ひ立た其日から、金の工面に樣々の衒事、日外座摩で摺かへた、其銀故ゑ難義さつしやる久松樣が主人の若旦那で有たとゝ夢三寶、たつた今聞て腸がひつくり返つた拷的目當のそれたも不孝の罰、母者人堪忍して、下さりませと具實具身の後悔ゝ、昔に返る稚顏、其氣に成たら親子じや物何の憎かろ、よふ健で居てくれたな、母者人、あつかしかつたと、抱付繻絆の袖を絞りが誠、大づけ涙、殊勝あり、親子の心底感心しました、夫程に二人の衆が、心を盡す吉光の守り刀ゝ爰に有どや、エ、そりや又どふして、お前のお手に、ナア緣ゝ不思議と久松の人がら、よし有人と見た故ゑ尋ねて聞た氏素情、守り

刀の入譯、廻り廻つて山家屋に有と聞出し、お染を望むを幸に、こつちから乞て取た結納の證、久松そなたに是がやりたい斗よ、嫌ふ娘を山家屋へやらねばならぬも爰の譯、是を土産に本知よ歸れば和泉の此家中相良久松樣いつ迄も油屋の丁稚で居るがみめでい有まい、まだ年の明ぬ中と、わしへの義理や何やかや、譯もない事思いずと、早ふ出世さえやんせと渡す後家鞘ぬけめおき、情けよお庄が、忝涙ふがひない我々が思ひ込だ念がとゞいて、嬉しい共、有がたい共、久松樣、お禮を〳〵。ア、是、禮い來年ゆるりと、ア行えやんせ、ホンニ母者人、うか〳〵して居る所えやない、今夜の内に藏屋敷へお供して、お留主居へお目見へおされずば、歸參の願ひが叶ふまい、ヤア〳〵若旦那、早ふ〳〵に久松い、お染よ引るゝ乱れ髪、撫付る間もせいしおく、突出す鐘い、早夜半時刻が移ると勘六が、先に押立かけ出す足首、片息おがら取付小助投込くゞり戸、浮家樣おさらば浮無事

でまめでと内と外隔つる、一夜大年の鐘ん百八煩惱を跡に、見捨て「急き行、跡よむざんや油屋の、お染ん一人娘氣よ、思ひ詰たる久松よ、別るゝ樣子立聞に聞て氣もきへ胸せかれ、爰で添れぬ緣あらば、未來で積る白雪の庭へ、あく〳〵折からに、お染〳〵と母のお勝が聲すれば、アイ〳〵と元の座敷へ立戻る、お勝ん さあらぬ顏色にて、あすん目出たい元日、年の終りん寢ぬ物ぞやげあたとへそふあふても、寺〳〵の鐘の音で、寢られぬから持病の癪が差込で、アイタ〳〵ちつと爰を押へてたも、あいと娘ん何氣あく手を差入る懷を、明て夫とん縮帶、障る手先にお染ん悔り、嗅ねこりやお前腹帶ぞやあいかいあと、思ひがけあき興覺顏、娘そあた腹帶と云物、ぞて見やつた事が有かエイいへ〳〵何のアア腹帶とやら、ついに見た事もあいけれど、おあかよやゝを胞した時此樣よ、卷て置物ぞやと咄しよ聞た斗、オヽ、よふぞつて居やる、いかにもこりや腹帶イヤサア癪を押へる腹帶、此癪

の直る藥をコレ見や買てゝ置たれど、下女にも男よも煎じて貰ふ人がない、わがみ太義あがら此藥、誰も人の見ぬ樣に、こつそりと煎じてたも、アノ噂沒の何云ゑやんす、藥上るに誰よ遠慮、イヤ〳〵人よ見せられぬ、こりや此癪を押下るおろし藥、エヽイキ、肝が潰れふ娘の手前も恥かしけれど、太左衞門殿に別れてから、後家ゝ立ても離れぬ煩惱嵐三右衞門の芝居に誘ゝれ、名ゝ云れぬが美しい若衆形をふつと見てから、思ひ切にも切れぬ惡緣それが積つて情あい、ツヽこんあ癪に成たゝいのふ、かういふたら定めてそあたの心でゝ、噂沒の未練らしい、わしらがそんあ事が出來たら、井戸ありと身を投て死で仕廻ふよ、比怯あ命おしむ共思やらふが、夫でゝ我身斗ゑやあい、世間へぱつと沙汰に成て油屋の家ゝ是限、わしも色香を知あがら、心よ好ぬ山家屋へ、嫁入さすも家太切、今の若衆形の事ふつつり思ひとまつた證據に、おあかの癪をおろし藥、思ひ切て煎じてたも、

折角佛樣のお世話で、五月よも成たもの、いおらしけれど、子を助れぺ親が死、いひかいした男迄生て居ぬ氣を知た故、三方四方を納るい、コレそあたの思ひ切一つといいふ物の譬にも、子かも孫い可愛といふに、初孫に日の目も見せず、水よあせとの胴欲を教へる母が心の中い、コレ鬼玄やいいの〳〵、男の爲親の爲、家相續の爲と思ふて、氣に入ぬ嫁入玄てたも、コレ一生の頼み玄やと、我子を拜む母親の義理の腹帶玄め泣に、いかにも嫁入致しませふ、出かゑやつた〳〵よふ云てたもつたのふ、其かいりにゑふぞして、早ふ飽れて戻る樣に、わしや神佛を祈つて居ると、粹あ親程取分迫るせつあさ娘の心、互よ思ひやるせあき親子の、誠ぞ道理あるやゝ時移り、久松い最一度お染に晦乞死る覺悟に立戻り塀の外面に有ぞ共、知ずお勝い、、嬉しや〳〵、翌いめでたい元日、泣顔ふいて神樣へ何やかやお頼ゆそ、お玄やいのと連て行、見越の枝に三尺帶ひらりと

内へ久松があゝや人かげ見られじと潜む、暗き夜藏の戸の明たを幸そつと入、跡から付て見濟す小助、外から戸前をぞつさりと鼠落しの仕濟し顔、折から外にゝ小挑燈、雪の傘差かゝる鈴木彌忠太、跡を慕ふて勘六が息もすた〳〵、彌忠太殿〳〵一遍こあたを尋たゝいの、身共に何ぞ用が有か、有段か〳〵、こあたが盗んで立退た吉光の守刀、質屋ゝ有て手ゝ入た故、たつた今藏屋敷へ持て往た所が、眞赤な贋物、正眞ゝこあたが持て居よゝ、尋常に出した〳〵、ゝゝゝいかにも推量の通り、質屋めも一ぱいくらゝしたの玄や、正眞ゝおれが持て往て立身の種にする、温に渡てよい物か、夫聞たらもふ能、其刀ゝ大かた爰ゝと、拇ゝかける手をもぎ放し、直ゝすらりと拔打を傘でぱつゑり請身の手だれ、内ゝ妹脊の様がゝより庭の井筒に合掌し、南無阿彌陀佛の聲聞取、お染ゐか、久松か、どふでも死ねべ、あらぬ身の上、未來ゝいつゑよに手ゝ手を取て、組合外の暗紛れ、

手に障つたる小脇差、探つて見れば九寸五分、扨こそ吉光、夫やつてゝとむしやぶり付を踏飛し、エイ、忝い、武運の花の開き時、久松樣ゝ何處にござると、夫と白雪白壁の、藏と庭とにあむあみだ、アッと苦しむ一聲に、驚くお勝久三の小助、久松めゝくたばつたと、呼ゝり出るを取て引敷、エイ、早まつた沙最期と、恨むよかひも百八の鐘を打切ゑら〳〵明かゝいの聲と諸共に、年のおゝりに明渡る、春を重ねて久松が、名ゝ大坂の東堀今に傳へて殘りける

安永九庚子年九月廿八日

お染久松 新板歌祭文 終

明治廿六年六月廿一日印刷
明治廿六年六月廿五日發行

新版歌祭文

飜刻兼發行者　日本橋區通四丁目四番地　內藤加我
印刷者　日本橋區新和泉町壹番地　瀧川三代太郎
發兌　日本橋區通四丁目四番地　金櫻堂
印刷所　日本橋區新和泉町壹番地　今古堂活版所